

淳君、こんなわたしを許してください。ママはもうだめ・  
..だめなの...ごめんなさい。あなたに知られてはいけな  
い暗い秘密をもってしまいました。ママは.....あなたの  
お友達に何度も犯されています。それも一人ではありません。  
何人ものお友達に輪姦されました。レイプされた日から  
毎日身体を求められています。本当に毎日なんです...

今日も淳君が今座っているソファで篤志君と海人君にい  
いように弄ばれていました。

「淳のママよお、ストリップだぜ」

「セクシーに脱ぎなよ」

「もっと尻を振るんだ！」

「ふふふ、ママさんのご自慢のおっぱいもふるんふるんっ  
て振りなよ」

あなたが塾に行ってお留守の間、ママは篤志君と海人君の  
目の前で、衣服を一枚一枚脱がなければなりません。あな  
たと生活しているリビングという空間で全裸になることは  
とっても恥ずかしいの。もちろん寝室でもあなたのお友達

に裸を見られるのは恥ずかしいわ。篤志君も海人君も、そしてそのほかのお友達もわたしに恥ずかしい思いをさせて楽しんでいるの。

いよいよブラとパンティだけになりました。お揃いの刺繍の入った白いおしゃれな下着です。ママは毎日下着に気を遣わなければなりません。いつも見られることを意識しなければならなくなりました。ブラをはずすと露出した乳房にあなたと同じ年の男の子たちの視線が痛いほどに突き刺さります。ああー、見ないで…恥ずかしい…

「美砂江、胸をふるんふるんって揺らせて見せなよ」

ずっと年下の男の子たちに「美砂江」と呼び捨てにされる屈辱感がママの羞恥心をえぐり出してきます。自分で剥き出しにした乳房を揺らすなんて淫らすぎます。まるで娼婦のような行為です。亡くなったパパの前でもそんな挑発的な行為はしたことはありません。

でも、海人君と篤志君の要求に、ママは素直に従いました。いつの間にか、あなたのお友達たちの言いなりになっ

ています。恥ずかしい写真やビデオをいっぱい撮影されました。それをあなたに見せると言われれば、いいなりになるしかありません。本当に恥ずかしい写真です。ビデオで撮影されたママの姿も死にたくなるほど恥ずかしいものばかりです。足を開いて指を使っているはしたない姿、男性のペニスの形をした淫具をあそこに入れている姿、そして、おしっこをしているところさえ撮影されました。……さらに、浣腸されて、汚いものをお漏らししている姿まで……もうママはだめなんです。淳君、ごめんなさい。ママはあなたのお友達の言いなりになって、毎日身体を玩具にされて……母親失格なんです。

パンティー一枚だけを身につけてリビングで胸を左右に振りました。自分からゆさゆさと揺すってみせるのです。ママの乳房がぷるんぷるんと踊ります。

「美砂江のおっぱい、とろけそうな柔らかさとこの弾力感がたまらないよな」

「まったくいい体しているぜ」

「パンティも脱いじゃいなよ」

「いつものように尻をセクシーにくねらせながら脱ぐんだぜ」

ママはパンティーに指をかけたまま、お尻を突き出して左右にくねらせました。顔はかっとなつて熱くなっています。ストリップの仕方は、あなたの同級生の子たちから何度も教育されています。お尻踊りに気持ちが入っていないと、ビシッと臀丘を叩かれるんです。ですから、ママは腰から大胆にくねらせてお尻踊りをしなければなりません。

お尻を振りながらゆっくりとパンティを下ろしていくのです。もちろん突きだしたお尻は、ソファに座っている篤志君と海人君に向けています。パンティがママの太股に丸く絡まっています。お尻が剥き出しになっています。それでもお尻を左右に振ってなければなりません。とっても恥ずかしいのに、淫らにお尻を振ることが義務づけられています。足を開いて剥き出しのお尻をぐっと突き出すことさえもママはしているのです。あなたの同級生の子たちか

ら命令されて言いなりになっているのはすごく惨めです。  
いい大人が、いくつもの恥ずかしい命令をされているので  
す。暗い秘密です。どうしてこんなことになってしまった  
のか。後悔の念が絶えません。ママが一番恐れていること  
はあなたに知られることなんです。ママは言いなりになる  
しかありません。

お尻の谷間が開いています。ママの恥ずかしいところが  
後ろから丸見えになっているかと思うと、顔から火が出そ  
うな激しい羞恥に襲われます。決して慣れることのできな  
い恥ずかしい行為です。

「淳のママさんのおまんこ、後ろから丸見えだぜ」

「肛門もぼっちり見えているよな」

篤志君も海人君もママの羞恥心をさらにえぐり出してきま  
す。ママを辱めることばかり口にするんです。

「美砂江の女のすべてを見てください」

前をむいたママは、あなたの同級生に躡けられた言葉を言  
いながら、指を股間にあてがわなければなりません。自分

で女性器の内部まで露出するのです。ああ、なんて恥ずかしいことでしょうか。足を閉じたくなります。でもそれは許されません。

「もう濡らしてるじゃないか」

「ふふふ、おまんこを見られて感じていやがる」

「これからたっぷりセックスできることに期待しているのさ」

う、うそです…美砂江はそんな女ではありません。ママは、濡らしてなんかいません。こんなこと、いやでたまらないのです。人を脅して言いなりにして、弄ぶなんて最低の行為です。人として許されるはずなどありません。ママはレイプされた当初は、必死にこんなことは卑劣な行為だと訴えました。黙っているからもうやめるように諭しました。でも男の子たちは誰もママの言うことに耳を貸しません。ママの懇願を無視してペニスを突きつけるのです。いつの間にか、ママは卑劣な行為をやめさせることをあきらめてしまっていました。

「美砂江、息子の同級生の若いペニスが好きですって言いなよ」

ママは、恥ずかしいところを開いたままの姿で、海人君の命じたとおりに

「・・・息子の同級生の・・・若いペニスが・・・好きです」

と恥ずかしい言葉を口にしました。淳君、こんな言葉さえ口にするようになってしまったママを許してください。

「美砂江のおまんこ、綺麗なピンクだな」

「クリちゃんが膨らんで顔を出しているぜ」

あなたの同級生の子たちにのぞき込まれながら、ママはあられもない格好を晒し続けるのです。

「美砂江の大好きなペニスを恵んでやるぜ」

篤志君も海人君も下半身を裸にして、勃起させたペニスをママの顔の前に突きだしてきます。天を突く勢いを示す二本のペニスがママの顔の前に近づけられます。そして篤志君のペニスがママの唇に触れました。海人君のペニスもママの唇に押しつけられています。

「選りなよ。どっちのペニスを啜えたいんだ？」

篤志君の質問はいじわるです。選りるはずなどありません。

どちらのペニスもママを辱めるために隆々と勃起している

のです。ママは、二本のペニスを交互に口に啜えました。

その間もソファに座って開脚の姿勢のままです。そして自

分の指で恥部を開き続けています。

「二本ともほしいんだな？」

海人君が笑い声混じりに訊いてきます。ママはこくりと頷

きながら、二本のペニスを口で啜えていました。